新作玩具体験会２―前編―サンプル

【ただいま帰宅しました。お腹が空きました】

時刻は十六時。講義を終えて自転車で帰宅し、その報告。

（ええとあとは……）

そうだった、友達に飲みに誘われたのだ。今夜十九時、駅前の居酒屋。明日は土曜で休みだし、もうすぐテスト期間に入るのでその前に遊んでおこうという名目。

【今夜は友達と居酒屋に行って】

途中まで打ち手を止める。本当に行ってもいいのだろうか、と思ったのだ。

宗形と交際するようになってから二か月、アルバイトは何もしていない。大学から帰宅したら家のことをして、宗形の帰りを待って。あとは普通の恋人同士としての時間を過ごしているだけの日々。

この一軒家は宗形の持ち物なので家賃はなし。生活費も宗形持ちで、食材や日用品の買い物用にと渡されている月々のお金の他にお小遣いも渡されている。でもそれは宗形のお金なのだ。

確かに学生なのだから友達と買い物に行くとか遊びに行くとかということはある。それはアルバイトを辞めるときにも宗形に言ってあったし、だからこそこうしてお小遣いをくれているのだけれどやはり自分で働いて得た金ではないし、それどころか宗形が働いて稼いだものなのだ、という思いが強かった。それを、宗形が仕事をしている間に遊びで使う――それがどうにも受け入れにくかった。

（でもなぁ……）

友達は大切だし、友達の話をしても宗形は嫌な顔一つしない。それどころか友達は大切にと言ってくれるし、理解はあると思う。でも、やはり気軽に使えるお金ではない。

（どうしよう……）

飲むのは複数人の友達だ。自分一人断ったところで集まることがなくなるわけでもないし、迷惑にはならないだろう。でも久しぶりの夜の外出だ。そう思うと行きたいと思ってしまう。

（うーん……）

でもお金の出所を思うとやはり行きにくい。これが一緒に住んでいなかったのなら黙って行ってしまうこともできたのかもしれないけれど今は一緒に住んでいるし、夕食作りも慶人の役目。もちろん宗形の夕食は作ってから行くつもりだけれど。

中途半端に打ち込んだメールの画面を見る。上に表示された時間を見るともう帰宅してから十五分も経ってしまっていた。

どうしようかな、と思っていると手の中の携帯が震えた。画面には宗形の文字。

「も、もしもしっ」
『お帰り』
「あ……ただいま……」
『何かあった？』
「え……」
『連絡もないし、声に元気がないな』
「あ……すみません……」
きっとカメラで帰宅を知ったのだろう。『携帯を弄っている』素振りはあるのに送られて来ないからと電話を寄越したのだ。
「あの……」
『うん』
宗形は大人だ。それに心も広い。だからきっと、言えば「行っておいで」と言ってくれる。でもそれはずるいような気がして。
「……いえ、あの、お腹空いちゃって。夜ご飯何にしようかなってレシピサイト見ちゃってました」
行くのは止めよう、と思った。
『……そう』
数瞬の間。嘘に気付かれたのだろうか。
「……何か食べたいもの、ありますか」
でも、今更嘘だとは言えない。
『いや、慶人くんの作ったものなら何でも美味しいからね』
「そんな……」
裕福な家庭で育った宗形の口に合うようなものを作れている自信はなかった。慶人が作れるのは簡単な料理だけで、だからこそ少しでもレパートリーを増やそうと日々時間があればレシピサイトを覗いている。まぁ、今は見ていなかったけれど。
「……今夜、早く帰れそうですか」
『どうかな……普段と変わらないと思うが。何かあったかな』
「いえ……」
飲み会に行かないのなら少しでも早く帰ってきてほしいと思ってしまった。いや、普段から早い帰宅を待ち望んではいるけれど、今回は完全に身勝手な理由。今頃楽しんでいるのかな、という思いを紛らわせてほしいだけの。

『慶人くん、何でも話していいんだよ』
「え？」
『思っていること。悩みとか、私に変わってほしいところとか』
「あ……」
やはり気付いているのだ。
もしかしてリビングに設置されたカメラは携帯の画面まで撮れるようになっているのだろうか――いや、さすがにそれはないだろう。きっと慶人の様子から悩みがあると察してくれただけだ。
『可愛くおねだりしてみてほしい』
「ぁ……ゃ……」
宗形が「おねだり」という言葉を使うのは大抵いやらしいことをしているときだ。「おねだりしてごらん」と甘く囁かれ、はしたない言葉をたくさん告げて叶えてもらう。
『えっちな顔になってる』
「あっ……」
正面にもカメラがあるのか。もう場所は把握しきれていない。
「や……見ないで……」
恥ずかしい。でもどこを向いても見られてしまう気がして、かと言って他の部屋にもカメラがあると聞いている以上逃げ場はなかった。
『可愛い。最近オナニーしてないから溜まってるかな』
「っ……ゃぁ……」
確かにしていないけれど、その分抱かれている。穏やかに優しく、落ち着いた状態でイける身体にしてもらった。だからもう練習は必要なくなったのだ。だから家に一人でいても、オナニーすることはほとんどない。だって自分でするよりも宗形にしてもらった方が何倍も気持ち良くて、幸せだから。
『脱いで見せて』
「あ……え？」
『ペニスを見せて』
そうだった。普段なら帰宅をメールで告げたらそのまますぐに服を脱いで裸で過ごすのに、今日は悩み過ぎて服を着たままだった。
『脱いでごらん』
「ぁ……」
それにしても宗形は今、仕事中ではないのだろうか。こんないやらしい会話を、いくら専用の部屋が

あるとはいえしていていいのだろうか。
でも拒否なんてできなかった。一度携帯をソファに置いて立ち上がり、するするとズボンと下着を下ろしていく。
（……見られてるっ……）
どのアングルで見られているのだろう。ソファから立ち上がった状態で陰部を露出しただけの姿を――それだけで簡単に勃起してしまうペニスを。
『慶人くん』
呼ばれた声が聞こえたので、急いで携帯を耳に当てる。
『ちゃんと脱げたね』
「はい……」
『ペニスがつらそうだ』
「……つらいです……」
『イきたい？』
「はい……」
もう二か月も射精していない。でも週に一度、宗形はミルキングで抜いてくれていた。
『ベッドでエネマグラを入れなさい』
「ぁ……」
早く気持ち良くなりたくて、快感だけを求めて動く。
「はい」
ズボンと下着を引き上げ寝室に向かう。本当はもう、走り出したいくらいの気持ちだった。
「エネマグラ……どれ……」
クローゼットを開け、その中に置かれた棚の引き出しを開けた。宗形が管理してくれているそこにはたくさんのエネマグラが並んでいる。以前違いについて質問してみたところ、質感・硬さ・素材・太さ・長さ・会陰に当たる外部の形状……と全て違うんだよ、と教えてくれた覚えがある。全ての違いはまだ体感できていないけれど、見ているだけで身体は疼く。
『好きなのを選びなさい』
～～～～
そして週末。土曜の朝。

「総一郎さん……」
もう下腹部は限界だった。それでなくてももう長いこと射精していないというのに。
「おはよう」
「ぁ……おはようございます……」
そうだった。朝の挨拶もせずに身体をねだってしまった。
「朝食は？」
「やっ……」
まだベッドの中。寝起きの状態。でももうとにかく欲しくてたまらない。
「総一郎さん……」
「慶人くんは本当にいやらしいね」
「だってっ……」
「ああ、ちゃんとオナニーも我慢できていたのは知っているよ」
この一週間、本当につらかった。当然宗形にも抱いてもらうことはなくて、でも家の中では全裸で過ごさなくてはならなくて。しかも宗形の帰宅がいつもより早くて、お風呂に入れてもらったりして。熱を持て余した身体を撫でるように手で洗われて勃起して、水で落ち着かされてからまた洗われて。アナルを洗うときなんてまるで皺を一本ずつ洗うかのように、四つん這いで洗われた。
そして毎日毎日いやらしいことを言われ興奮して。剥き出しの身体では当然勃起を隠すこともできなくて、萎えるまで観察され続けたことさえあった。
だからもう、本当に壊れてしまいそうなくらい限界だった。
「総一郎さん……」
もう十分きついお仕置きだった。だからもう、甘やかしてほしい。アナルに宗形のペニスを入れてほしい。一つになりたい。そしてもうお仕置きは終わりだよと甘い声で囁いてほしい。
「もう……おちんちん……」
宗形は小さく笑うと頷いた。
「分かった。じゃあお仕置きの準備をするよ」
「え……？」
（お仕置きの準備――？）
「また忘れてしまったのか。よほどつらかったんだね。でも言ったはずだよ。お仕置きは週末にしよう、と」
「あ……」

そうだった。あの日は月曜日で翌日も講義があったから週末にとなったんだった。
「ごめんなさい……」
宗形は何も言わず、でも頭を撫でてくれた。
「待っていて」
「……はい」
やはりお仕置きはされるのだ。一体どんなお仕置きをされるのだろうと不安になる。
（痛いことは……多分されないと思うけど……）
過去一度も痛い思いをさせられたことはなかった。いやでもそもそも怒らせたことがなかったからかもしれないけれど。
宗形はベッドから降りるとクローゼットを開けた。二人の着替えや、玩具が入っているクローゼットだ。
（あ……）
宗形が手にしたのは玩具が入った引き出しだった。過去、もしかしたら宗形よりも慶人の方が触れることが多かったかもしれない引き出し。そこに何が入っているのか、嫌でも全て分かっていた。
（エネマグラ……）
宗形が取り出したのはエネマグラだった。それも慶人が一番好きな疑似触手タイプのもの。
次に取り出したのはローションだった。けれどこちらは一度も使ったことのないもの。でも遠目でも見た目で分かる。あれは確か、温感ローションだ。
もう戻ってくるだろうと思ったのに、宗形はクローゼットの中に入っていった。奥には宗形の物しかないので慶人は入ったこともない。
（何を……？）
それとも宗形の着替えだろうか、と待っていると、宗形はすぐに戻ってきた。大きな袋を手に提げて。
そのパッケージに見えたのは犬の写真だった。
（嘘……）
それは動物の排泄用のシート、所謂ペットシーツだった。
「お待たせ」
「あ……」
「ん？」
「……いえ……」
まさか本当にお漏らしさせようと思っているのだろうか。思い出すのはあの苦しいほどの強い快感。

もうやめてと思いながら涙を零し続けた時間。
「少しずれてくれるかな」
言われた通り身体をずらすと、宗形はベッドの中央にペットシーツを敷いた。そしてその上に腰が来るように寝かされる。
「総一郎さん……」
怖い。正直すごく怖かった。だって亀頭用のローターを使われたとき、まだ慶人のオナニーは普通にペニスを弄るものだったのだ。つまり今よりも刺激に慣れた状態だった。なのに今そんなことをされたら一体どうなってしまうのだろう。
「……大丈夫、痛いことも怖いこともしないよ。言っただろう？　私は亀頭は弄らない」
「あ……」
そうだった。そう言っていた。それを忘れていたわけではないけれど、人の気持ちは変わるものだから。
「さあ、お尻にエネマグラを入れるよ。もうほぐさなくてもごっくんできるかな」
「ん……」
お仕置きだと言いながら、宗形の様子は普段と全く変わらない。優しくて穏やかなその声に少しずつ心が落ち着きを取り戻していく。
「そう、いいこだね。ゆっくり息をして」
すーはーと息をしていると、ローションをまとったエネマグラが挿入された。
「あっ……」
「気持ちいい？」
「んっ……きもちい……」
待ちに待った刺激。久しぶりなそれはアナルを拡げられるだけでも気持ちいい。
「息は止めず、そのまま」
「はい……」
目を閉じて意識をエネマグラに向けながら深呼吸を繰り返す。
（温かい……）
やはり温感ローションだったのだ。お腹の内側から温かい。
「ん……」
「気持ちいいね……」
「はい……」

でもお仕置きのはずなのに。やはり優しいからお仕置きはなしにしてくれたということだろうか。
「今日はね、イってはいけないよ」
「え……？」
思わず目を開いてしまった。でも耐えられず宗形を見上げる。
「今日は、と言っても……そうだね、十九時になったらイってもいいよ」
「あ……え……？」
壁に掛けられた時計に視線を向ける。短針は八。
「あと十一時間……今日はベッドから降りてはいけないよ。食事は私が食べさせるし、排泄は……見ての通りだ。困ることはないね」
「や……うそ……そんな……」
だってこんなに気持ちいいのに。温感ローションは温かくて、そのせいで余計に早く疑似触手が動き出してしまいそうなのに。
「お仕置きだからね。うんちがしたくなったらエネマグラは抜かせてあげるから」
「抜かせて……？」
その言い方が気になった。「抜いてあげるから」じゃないところが。
「うん。前もちゃんと自分の力で抜けたからね。だから今回もそうして抜くんだよ。うんちもそのまま見ていてあげるから」
「あ……や……」
そんな。確かにもう排便を見られることには慣れてきているけれど、こんな風にベッドに寝転んだ状態で出したことなんて一度もない。
「大丈夫。十九時までイくのを耐えられたらお仕置きはおしまいだよ」

〜〜〜〜

「あ……あっ……あ……ふう……ふうー……」
絶頂を我慢するときのように必死に息を吐いて尿意に耐える。でも、宗形がどのくらいの時間で戻ってくるかすら読めない今、終わりのない我慢は耐えがたいものだった。
「あ……ダメ……」
それでも二十分は我慢した。けれど、漏れ出してしまった。
「あ……ああ……」

しょろしょろと尿がペットシーツにシミを作っていく。見たくないのに、尿がペットシーツから零れてしまうのではないかと思うと見ずにはいられなくて。

「やぁ……」

今日は全然水分を摂っていないはずなのに排尿が止まらない。怖い。ペットシーツの給水量を越えて溢れさせてしまったらどうしよう。

「ぁ……やぁ……総一郎さんっ……」

でもここからキッチンまでは声が届かない。それにそんな大きな声を出したらペニスが跳ねてしまいそうで。

「ああ……やぁ……」

けれど次第に勢いはなくなり、ゆっくりと排泄は終わった。

「あ……出た……出たぁ……」

幸い尿は全てペットシーツに吸水された。そのことに安堵するけれど、本当に一人のときにお漏らしをしてしまった、という恐怖に似たような感情を覚える。

（僕の身体……どうなっちゃうんだろう……）

宗形と交際を始めて、穏やかにイくことを覚えた。そしてそれが次第に癖になり、強すぎる刺激に怯えるようになって。ゆっくりゆっくり、息を乱さずにイくのが好きになったのに、もっと激しく求められたいという思いは残ったまま。それに、一番の変化は束縛、把握をされたいと思うようになったということだろう。宗形に二十四時間見ていてほしい。どんなときの自分も見逃さないで知っていてほしい。

（ぁ……うんち……）

やっと排尿が終わったところだというのに、今度は便意に襲われた。けれど今はエネマグラが入っている。これに触れることは許されないだろう。でも排便もしたい。うんちを出したい。

「ぁ……ああ……」

便が下りてきているのが分かった。でもエネマグラが邪魔をしていて上手く下りてくることができないような。お腹の奥の、中途半端なところが圧迫されて苦しいような感じがする。

「んっ……」

便に押されているのだろうか。エネマグラが小さく揺れているような感触があった。

「ぁ……ん……」

強い快感ではないが、便による圧迫感と相まって快感が募っていく。

「あっ……ん……ふぅー……ふぅー……」

ゆっくりした呼吸を意識して便意を必死に逃す。でもいきみたい。出したい。気を抜くとお腹に力が

入ってしまいそうになる。
ちら、と視線をドアに向けるけれど、宗形が戻ってくる気配はない。
（うんち……）
もう苦しい。それに少しずつ痛みを感じるようになってしまった。
（あ……最近出てなかったから……？）
普段だったら一日でも出なければ、出てないことをカメラで知っている宗形に指摘されアナルをほぐして排便の介助をしてもらっていたのだけれど、お仕置き週間であった今週はそれがなかった。だから出せなかった。
きっと、身体はもう宗形の手助けを待つようになってしまっていたのだろう。もう自分一人の力では上手に排便することができなくなっている。こうして限界が来るまでは。
「んっ……んんっ……ふう……っは、ふー……」
出したい。お腹が苦しい。
「ふうーふうーふ、ううっ、う、あっ……あっ」
（出ちゃうっ！）
便意がきつい。便にエネマグラが押し出されているような感覚がある。
「あ……あああっ！　あああっ！」
出る、もう我慢できない。アナルに力を入れて耐えていたけれど、それによる前立腺への刺激も感じないくらい便意が強くなっている。
「あ……ああっ」
ずる、とエネマグラが動いた。
便のお漏らしをしてしまう、という意識でペニスが起ち上がっていく。
「あ……出る……出ちゃう……」
もう力を入れておくことはできなかった。蠕動に任せて出す習慣がついている身体は勝手に力を抜いていく。
「あ……ああ……」
ずるずる、とエネマグラが抜け落ちた。そしてアナルは一度閉じ、便によってまたすぐに開く。
「ぁ……ん……ぁん……」
気持ちいい。硬過ぎず柔らか過ぎない便がゆっくりと排泄されていく。
「ああ……ん……あん……」
便が太く感じるのはたくさん出ているからだろうか。それとも本当に太いのか。

（たくさん溜まってたから……？）

恥ずかしい。でも便は止まらない。太くて長い便がゆっくりと呼吸に合せて出続けている。

「やぁ……」

今宗形もこの様子を見ているのだろうか。でももしかしたら排尿の話をしていたからペニス側ばかり見ているかもしれない。

「あん……」

便はまだ止まらない。途中で切れることもない。

後ろはきっとひどいことになっている。いや、横になった状態のまま動いてはいないのでぐちゃぐちゃということはないだろう。でも太く長い便がまるで尻尾のようにアナルから繋がっているのを見たら——驚くのか、それとも羞恥を慰めてくれるのか。

「総一郎さん……」

もしこの様子を見ているのなら来てほしい。

（あ……でもご飯中……？）

もしかしたら昼食を食べているのかもしれない。そしたらきっと見てはいないだろう。だって食事中に排尿シーンなんて見られない。さっきは見ていてくれると言っていたけれどそれは方便で、本当は見ていないのかもしれない。

「総一郎さん……」

それにしても戻りが遅い。もしかしてベッドで待っていることを忘れてしまったのだろうか。それとも疲れたからしばらく放っておこうと思っているのか。それは有り得るかもしれない。だって宗形は一週間仕事をして疲れているのだ。なのに朝食も食べる前から盛ってしまった。でも本当は朝くらいゆっくり休みたかったのかもしれない。

「うう……」

ペニスが萎えた。でも便は止まらない。今一度切れたけれど、すぐさま次の便がお腹を下りて排泄されていく。

「ふう……ふう……」

もう嫌だ、と思うのに便意は消えないし当然便もなくなることはない。せめてこの長い排便が早く終われればとお腹に力を入れようと試みるものの、しっかり躾けられているせいか力を入れることに恐怖心を覚えてしまっていた。

（もし見てたら……）

もうそれは有り得ないことのように感じているのに、それでもまだ望みは捨てられていなかった。も

し見てくれていたら――ダメと言われた腹筋を使う排泄をしているのを知られたらきっと傷付けてしまうだろう。それは嫌だ。ちゃんと、宗形がいないときでも言うことを聞けるいいこなのだと思ってほしかった。

「ぁ……ん……ふう……ふー……」

宗形が戻って来てくれるのを待ちながら排泄を続ける。いきめればすぐ終わるだろうに、蠕動に任せているので本当に遅い。

「ん……ふう……は、ん……ふう……はぁん……」

徐々に開きっぱなしのアナルが気持ち良く感じるようになってきてしまった。だって太い便を、アナルがしっかり拡がったまま咥えているのだ。気持ちいい。まさか排便でこんなに気持ち良くなってしまうなんて。

「あっ……ん……ふう……んっ、きもちっ……」

「慶人くん」

「あっ……」

「……うんちかな」

前編約5万文字です。

宜しくお願い致します。

前編

ペニスの匂い嗅ぎ・疑似触手オナホール・お漏らし(大小)・射精禁止・絶頂我慢・お仕置き・ペットシーツ・一生取れない貞操帯等